

高等学校芸術科書道仮名導入期の学習指導

—「いろは」に関するアンケート調査と学習プリント作成—

松本文子・横倉佳男

目次

- A 「書道」免許状取得予定学生の仮名学習 松本
- B 高等学校での仮名導入期の学習指導 横倉
 - (1) 高校生と「いろは」(アンケート実施)
 - 【1】一問題意識—
 - 【2】一アンケートの実施内容—
 - 【3】一アンケート結果と考察—
 - 【4】一まとめ—
 - (2) 「いろは」とその字源の学習プリント作成
 - (3) 学習プリント案—「いろは」単体と字源—

まず松本が、鶴見大学文学部日本文学科で、高等学校芸術科「書道」の教員免許状取得を希望する学生が履修する、仮名実技の授業について説明する。

次に横倉が、勤務校での指導経験に基づいて、高校生の仮名導入期の学習指導について問題意識を明らかにし、アンケートを実施して、その分析を踏まえて学習プリントを作成したことについて報告する。

A 「書道」免許状取得予定学生の仮名学習

鶴見大学文学部日本文学科での仮名実技の授業は、2年以上で履修する「書道Ⅱ」、3年以上で履修する「書道Ⅳ」、4年次(現1年生からは3・4年次)に履修する「書道Ⅴ」または「書道Ⅵ」に含まれる。これらをまとめて説明する。

授業の目的は、高校生に実技を教えるための力量を養うことと、学科

の専門でもある古典文学の実証的研究に資する基礎力を身につけることにある。平たく言えば、変体仮名を含む手本を書きながら、まず、筆で書かれた文字や古い本に見慣れ、読むのを楽しむことができるようになってほしい。その経験から得られた親しみが、次世代に受け継がれるのを期待する。

実技の授業は、基礎から始めて難易度を徐々に上げるので、段階履修（「書道Ⅱ」、「書道Ⅳ」、「書道Ⅴ」または「書道Ⅵ」の順に学ぶこと）が望ましい。古筆の手本を見て気づくこと、わかることを、実際に自分の手で書くことができるようになるまでには、ある程度の反復練習が必要であり、習熟していない段階では、何ができていないかにも気づかないようである。昔からの階梯に従い、基礎練習、基本的とされる古筆の臨書から始めることが力量の土台を作る。

「書道Ⅱ」前期の基礎練習は、「いろは」単体、おもな変体仮名、連綿（二字、三字、それ以上）、俳句・和歌の行書きと散らし書きなどで、古筆よりも大きい字粒から練習を始める。後期は『高野切第三種』の拡大臨書から始めて、実物大で毎時数行を書く。

「書道Ⅲ」前期はおもに『粘葉本和漢朗詠集』の漢字部分、仮名部分、両方を含む部分を臨書し、その後の数回は、他の和漢朗詠集と比較して臨書する。後期は『寸松庵色紙』、『継色紙』、その他の上代様古筆を臨書しつつ、自分が卒業制作として取り組みたい古筆の選定を始める。高校生が、授業で実技教材とする古筆を選ぶことを勧めている。「書道Ⅲ」以後の授業では、練習用料紙に清書することもある。「書道Ⅴ」と「書道Ⅵ」とは隔年開講で、漢字と仮名を学び、作品を制作する。仮名は『関戸本古今集』を課題とした後、各自が選定した古筆を究める。

学生が「いろは歌」を習うのは、「書道Ⅱ」、年度初めの3回分だけである。試みに10月末に授業で簡単な調査をしたところ、4年5名、2年15名の回答が得られた。4年は全員が「いろは歌」を暗唱していたが、完答3名、「る」「ゑ」など2ヶ所をまちがった者が2名だった。2

年は暗唱していない者が3名（20%、各12字・19字・22字を筆記）、完答が5名（33%）、まちがった者が7名（47%、誤答1が3名・2が1名・3が1名・4が2名）だった。古典を学ぶ者の常識として、さらに努力を求めたい。

以下、大学卒業以来33年間、都内の私立高等学校教諭として芸術科書道を担当してきた横倉が、アンケート調査を踏まえて、教材作成について報告する。

B 高等学校での仮名導入期の学習指導

(1) 高校生と「いろは」（アンケート実施）

【1】一問題意識一

仮名学習の導入として「いろは」48文字を最初に学ぶのが一般的である。これは中学校書写の教科書から高等学校書道の教科書、大学のテキストに至るまで「いろは」が「いろは歌」として掲載されていることからわかる。

高校生・大学生また一般成人対象者における仮名学習の第1歩として「いろは」を習う場合、平安古筆の字体を手本とするのが一般的である。

そのため現在日常生活で使用されている平仮名「あいうえお」の字形とは一見して明らかに異なる形につくる「く・え・す」や日常使用する機会の少ない「ゐ・ゑ」など古典的仮名遣いに用いられる文字を手本通りの字形で書けるようになるには高等学校の生徒を指導していると、いささか時間を要する場合が少なくない。

また、「あいうえお」順に慣れている生徒に平仮名は古来、「いろは歌」によって覚えられてきたという事実認識も時代の移ろいと共に薄くなり、「いろは歌」の認知度も年々低くなっているように感じている。

この点に関しては1979年の時点において既に小松英雄氏が、その著『いろはうた』で次のように指摘している。

—このごろでは、以呂波を最後まですらすら書ける人など、ほとんど

いないようである。「いろはにほへと／ちりぬるを」という出だしの一節なら、小学生でも聞きかじりで知っている、そのあとは一節を加えるごとに、脱落者が急激に増加する。－中略－いつのまにか、その表現が字義どおりには通用しない世の中になってしまっている。－

現在の中学校書写の教科書には「いろは歌」・「仮名の成立について」・「平仮名の字源とその字形成立の過程」などが載せられており、これらによって平仮名についての一通りの知識は学んでいてしかるべき状況にある。

しかし、実際に高等学校の書道の授業において仮名学習の導入として「いろは」を長年学ばせている側からすると、「いろは」を正しく記憶しており、前出小松氏が指摘したように、すらすらと書けるという状態の生徒は年々減少しているように感じている。同時に、その字源の把握もろんな様子である。

現在まで上記のような状況に関する統計的実態調査を行って考察した例をほとんど聞かない。

そこで「いろは」に関するアンケート調査を実施し、その実態を把握し、仮名の学習指導に役立てたいと考えた。

【2】－アンケートの実施内容－

1 目的

- ① 「いろは歌」の認知度と筆記による正答率を測る。
- ② 「いろは」の字源の認知度と正答率を測る。

2 実施方法

- ・ 目的の①・②によって2回アンケートを実施。
- ・ 無記名。
- ・ 項目に○を付ける。及び筆記で回答。

3 実施対象

- ・ 帝京高等学校、進学コース2年生・3年生。

- ・各学年とも6クラス。実施人数は後述。

4 実施日

- ・1回目 2018年（平成30年）6月下旬。
 - ・2回目 2018年（平成30年）7月上旬。
 - ・各クラスのホームルーム時に担任のもと実施。
- *当日欠席者は除く。

5 アンケート項目

—1回目—

- ①「いろは歌」を知っていますか。

—はい・いいえ—

- ②実際に硬筆で「いろは」を48マスの用紙に記入してもらおう。

—2回目—

- ①「いろは」に字源（字母）があることを知っていますか。

—はい・いいえ—

- ②実際に硬筆で「いろは」の字源を48マスの用紙に記入してもらおう。

*他にも関連する項目をいくつか挙げて実施したが、ここでは実施目的に合致した項目のみとする。

6 アンケート実施人数

| | 高校2年生 | 高校3年生 |
|-----------|-------|-------|
| 1回目（いろは歌） | 155名 | 172名 |
| 2回目（かな字源） | 162名 | 170名 |

【3】—アンケート結果と考察—

1 「いろは歌」の認知度

「いろは歌」を知っているか否かについては《表1》のような結果となった。

86%の生徒が「いろは歌」を知っていると回答しており、その認知度は低くないことがわかった。

《表1》

| | はい (知っている) | いいえ (知らない) | 無回答 | 総計 |
|----|---------------|---------------|-----|------|
| 高2 | 136人 | 14人 | 4人 | 154人 |
| | 88% | 9% | 3% | |
| 高3 | 145人 | 24人 | 3人 | 172人 |
| | 84% | 14% | 2% | |
| 総計 | 281人 | 38人 | 7人 | 326人 |
| | 86% | 12% | 2% | |

* %は小数点第1位を4捨5入した。

2 「いろは歌」の筆記正答率

「いろは歌」の認知度は86%と高い割合であったが「いろは歌」を筆記できるかということになると、認知度とはまた異なった結果が得られた。

「いろは歌」筆記回答の正答数の割合は《表2》のような結果となり、「ん」を含めた48文字を正しく筆記できた者の割合は5.8%。「す」までの47文字を正しく筆記できた者を含めても約20%である。

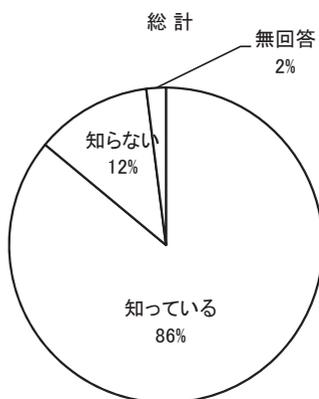
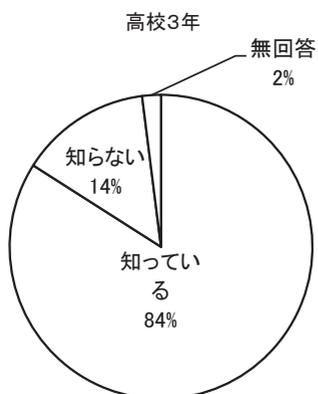
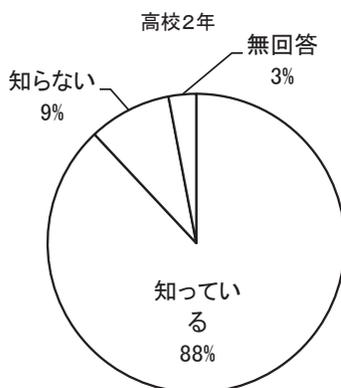
また、一人当たりの平均正答数は高3が32文字、高2が38文字で全体の平均は35文字という結果から、「知っている」と「正しく覚えて筆記できる」とは別であることがはっきりとわかる。

次に各文字別の正答率を見ると《表3》のような結果となった。

この結果を見ると次のような様相が見て取れるであろう。

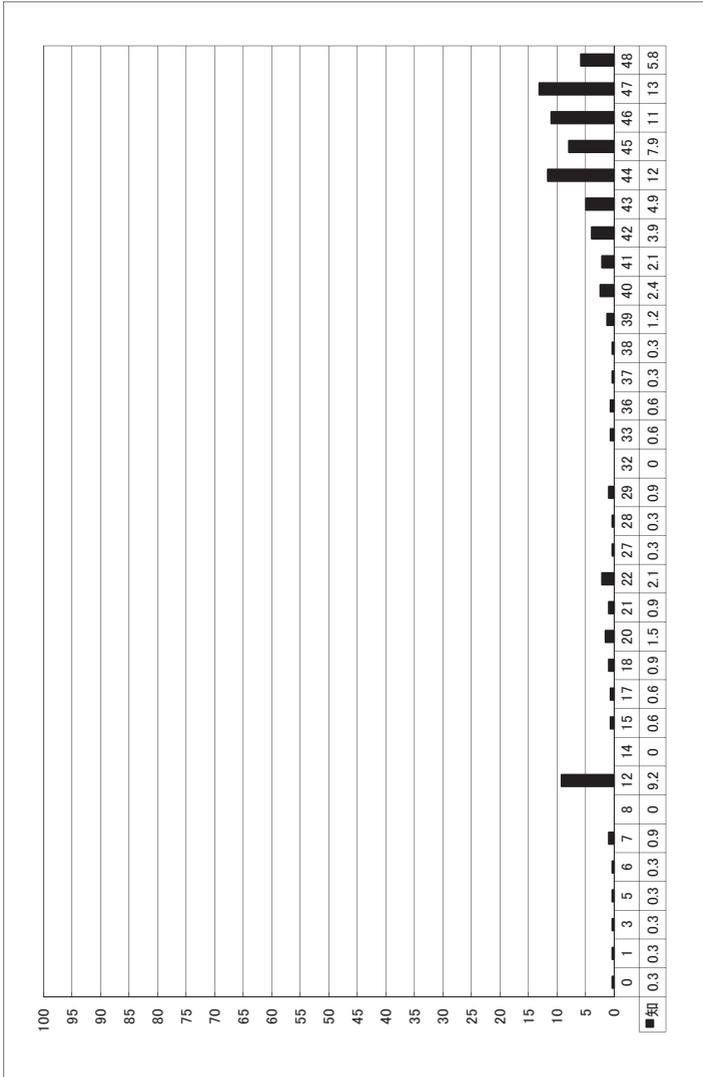
- ① 「い」から「を」までの正答率は「を」を除き90%を越える。
- ② 「わ」から「ら」までの正答率はほぼ75%以上80%未満である。
- ③ 「む」・「ろ」・「ゑ」・「ひ」・「ん」の各文字の正答率は50%以下となる。
- ④ 上記「む・ろ・ゑ・ひ・ん」を除き「う」以降の各字は、おおよそ

《表1》 グラフ



《表2》

高等学校校芸術科書道仮名導入期の学習指導



60～70%の正答率である。

上記4点が明確な傾向として見られ、全体の平均としては73%の正答率という結果を得た。③の正答率の低かった文字を除いた場合で77%の正答率があることから見て、「いろは歌」各文字の筆記正答率は平均7割強とみなされ、先述した一人当たりの平均正答数と合致する。

3 「いろは歌」の誤回答の傾向

《表3》で「む」・「ゐ」・「ゑ」・「ひ」・「ん」の正答率が低かった要因について考察してみた。

まず「む」・「ゐ」・「ゑ」・「ひ」の正答率の低さの要因を考えるにあたって、誤回答の割合が比較的多かった例をグラフにしたのが《表4》である。

これによると、「む→ん」・「ゐ→い」・「ゑ→え」・「ひ→い」、さらには「けふ」を「きょう」と誤記したケースは、いずれも旧仮名遣いを正しく把握できていないため、現代仮名遣いと混同、混乱からくる誤答と考えてよいであろう。

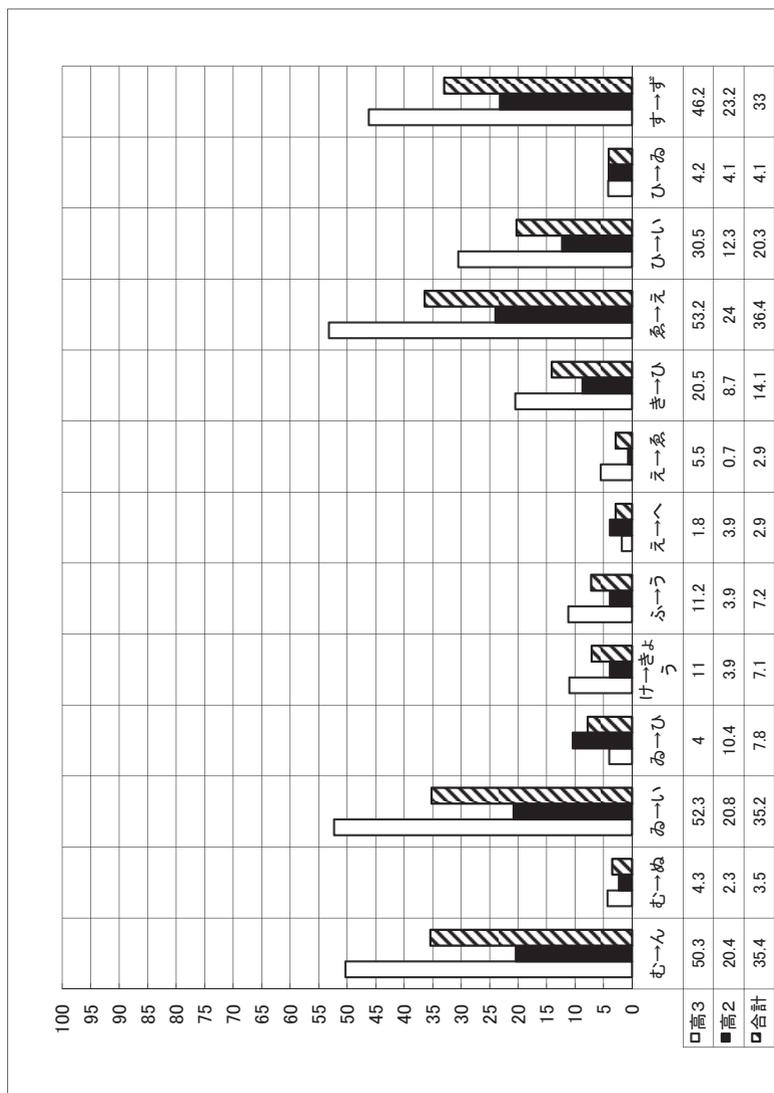
そのため上記に比べれば少ない割合ではあるが、「む→ぬ」・「ゐ→ひ」・「え→へ」・「え→ゑ」・「ひ→ゐ」といった回答も同様の要因によるものと考えられる。

これらの点は経験上からすると高等学校教育では往々にして見られる現象と考えられる。

次に注目すべきは「き→ひ」という誤答で、これは「き」1文字を取り上げるとわかりにくい現象であるが、「あさきゆめみし」を「あさひゆめみし」と覚えてしまった結果の誤答とみられる。「あさきゆめみし」の意味を把握していれば「あさひ」とはならないと思われるが、「ゆめみし」と切り離して記憶したために「あさひ」→「朝日」や「旭」といった意味の語句が連想されて回答した結果と想像される。

《表4》に示した「す」と「ん」についてであるが、「す→ず」につい

《表4》



では誤答とはいえないが、書の観点からすると濁点は基本的に付さないという立場から統計をまとめた結果であり、ここでは参考に留めておきたい。(正答率のグラフには「ず」も正答として含めてある)

「ん」は無回答率が83%とすべての文字で最も高い。これは「いろは歌」に「ん」を付けるかどうかという点と関わっていると考えられるので、他の文字の正答率の低さとは要因が異なろう。

4 「いろは歌」の認知率と筆記正答率の相関関係について

《表5》は「いろは歌」を知っていますか、という質問に対して、「はい」と回答した者と「いいえ」と回答した者の筆記の正答数とその人数をグラフにしたものである。(回答者は全体で324名)

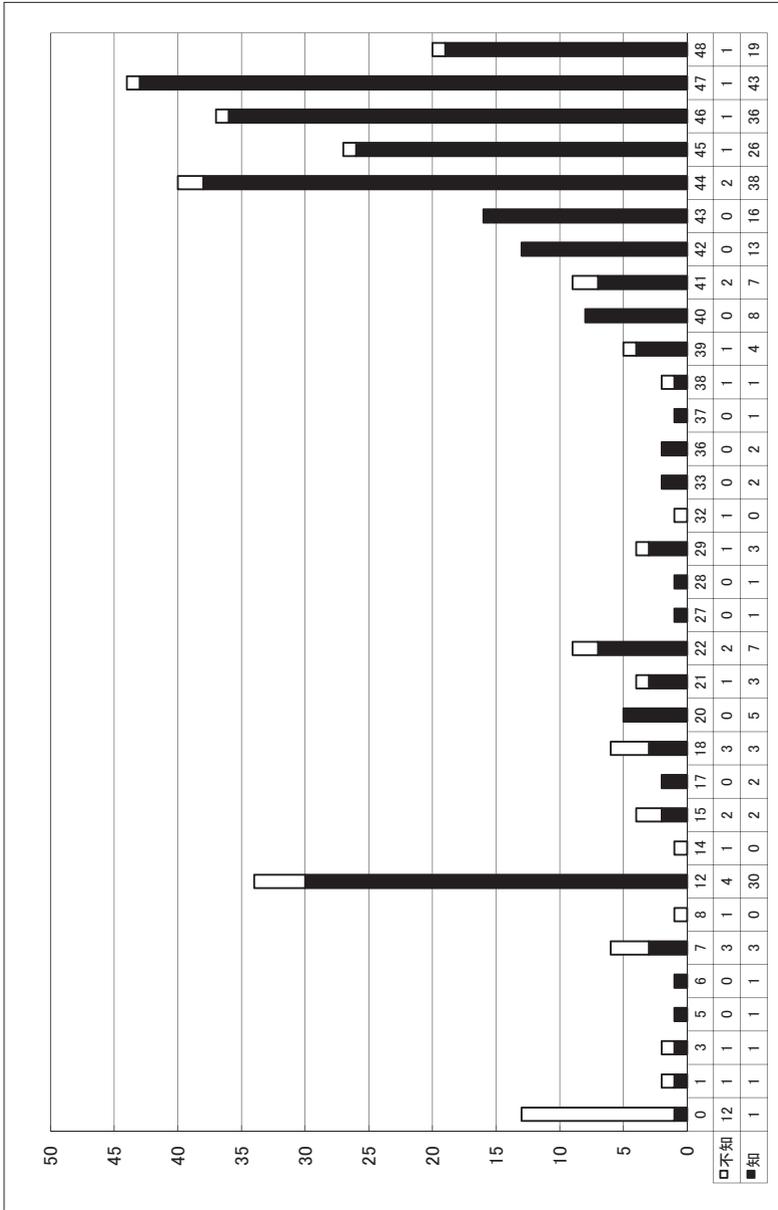
これを見ると「はい」と回答した者で正答数が0の者が1名。先述した平均正答数35字に達していない者が合計67名と全体の約20%、「はい」と回答した者281名の29%にのぼる。

一方「いいえ」と回答した者で35字以上を正答した者は「いいえ」と回答した者43名中10名で23%。回答者全体では3%という結果となった。

以上のことから、「いろは歌」を知っていますか、という質問事項に対して、完全に知っている・ほぼ知っている・聞いたことはある等、肯定的に「はい」と回答するケースと、全く知らない・名称しか知らない・何となく知っているが知っているとまでは言えない等、否定的に「いいえ」と回答するケースなど個人によって質問に対する捉え方が大きく異なる様相が窺える。

以上の結果から《表5》によれば、はじめの「いろは」3文字以内の正答者は「いろは歌」を知っていますか、という質問の回答が「はい」か「いいえ」かに関わらず、324名中17名で、全体の5%にあたる。質問事項に「いろは歌」という記述があることから筆記の回答が「いろは」から始まることは容易に想像できよう。その点を考慮すると、この

《表5》



集団は「いろは歌」を知らないか、知っていても筆記できるレベルでの記憶はしていないと考えられる。

正答数が4分の1、12文字以下の者は10%。その多数は「い」から「を」正答したとみなされる。半分の24文字以下は24%。半分以上正答した者は72%。4分の3以上の正答者が69%であり、これまで取り上げた数的データからも、「いろは歌」の存在自体の認知率は9割近くと高い割合であるが、正しく記憶し、かつ筆記できる者の割合は2割程度に留まり、7割が中途半端な記憶状態にあるといえよう。

5 「平仮名」の字源（字母）の認知度

「平仮名」には字源（字母）があることを知っていますか—はい・いいえ—に○を付けてもらうとともに、「いろは」が付してある48マスに字源を筆記してもらった。

《表6》が字源を知っているかどうかの結果である。

平仮名に字源があることを知らない割合は全体の85%と大半の生徒が平仮名に字源があることを知らないと回答した。

偶然にも《表1》の「いろは歌」を知っている割合と相反する状態となっており、字源の認知度は低いと考えられる。

6 平仮名の字源の正答率

平仮名の字源の正答率は《表7》のとおりである。

正答数の割合は字源の認知率が低いことから当然低い結果となっているが、46文字以上の正答者が10名、3%存在している。アンケートに「わからなくてもチャレンジしてみましよう」という文言を添えたが、当てずっぽうで偶然正解したと思われるケースも多分に窺えた。

また字源を「知らない」と回答した者にも正答数の多い者が半数いた。

これは、「字源・字母」という用語は知らないが、平仮名にはもとの

漢字があることは知っている可能性をうかがわせると同時に質問事項を簡潔にした場合、用いられた文言、用語の意味をどう汲み取れるかといった点に関わってくると思われる。

《表6》

| | はい (知っている) | いいえ (知らない) | 無回答 |
|-----------|---------------|---------------|-----|
| 高2 (162人) | 29人 | 131人 | 2人 |
| | 18% | 80% | 2% |
| 高3 (170人) | 16人 | 153人 | 1人 |
| | 9% | 90% | 1% |
| 全体 (332人) | 45人 | 284人 | 3人 |
| | 14% | 85% | 1% |

次に各文字別の正答率を《表8》で表した。

文字別の正答率をみると、10%を超えるのは「伊」・「呂」のみ。「保」・「和」・「宇」が8～9%前後の正答率がある以外はほぼ5%以下の正答率で字源を記憶している者が少ないことがわかる。

7 平仮名の字源の誤回答の傾向

字源を筆記する欄は空欄や白紙の回答が目立ったが、記入された回答の中で、目に付いた誤回答を《表9》で示した。

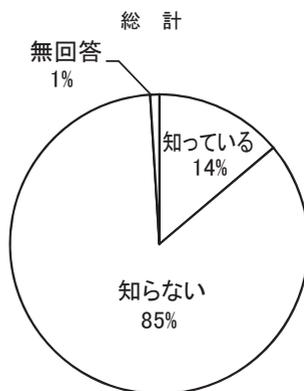
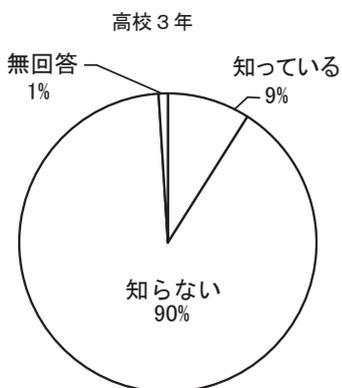
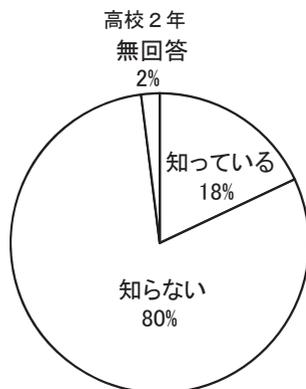
「以」を「伊」、「安」を「亜」と回答した例が30%前後みられたのが、特徴的な誤答であった。字源を知らないで、回答を試みた場合の1傾向とみられよう。

【4】—まとめ—

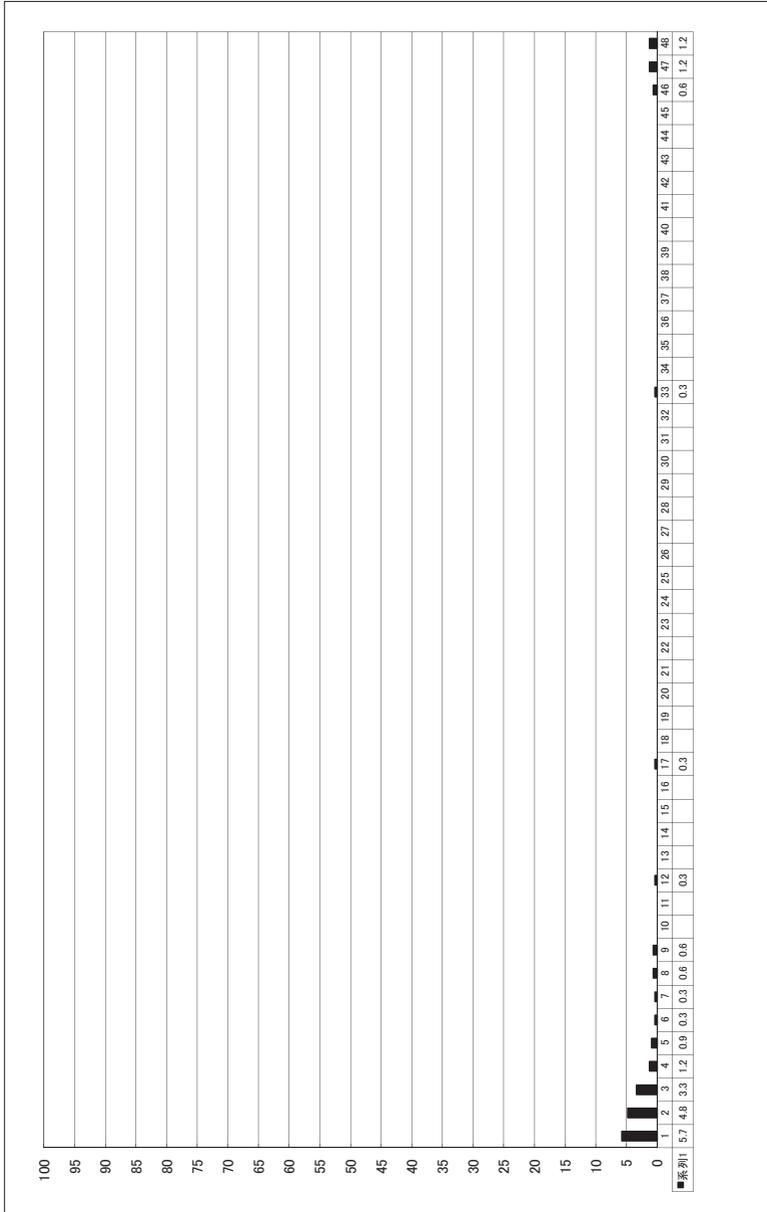
「いろは歌」の認知度と記憶度、および平仮名の字源の認知度と記憶度をアンケートによって調査したわけだが、当初の予想よりも「いろは

《表6》 グラフ

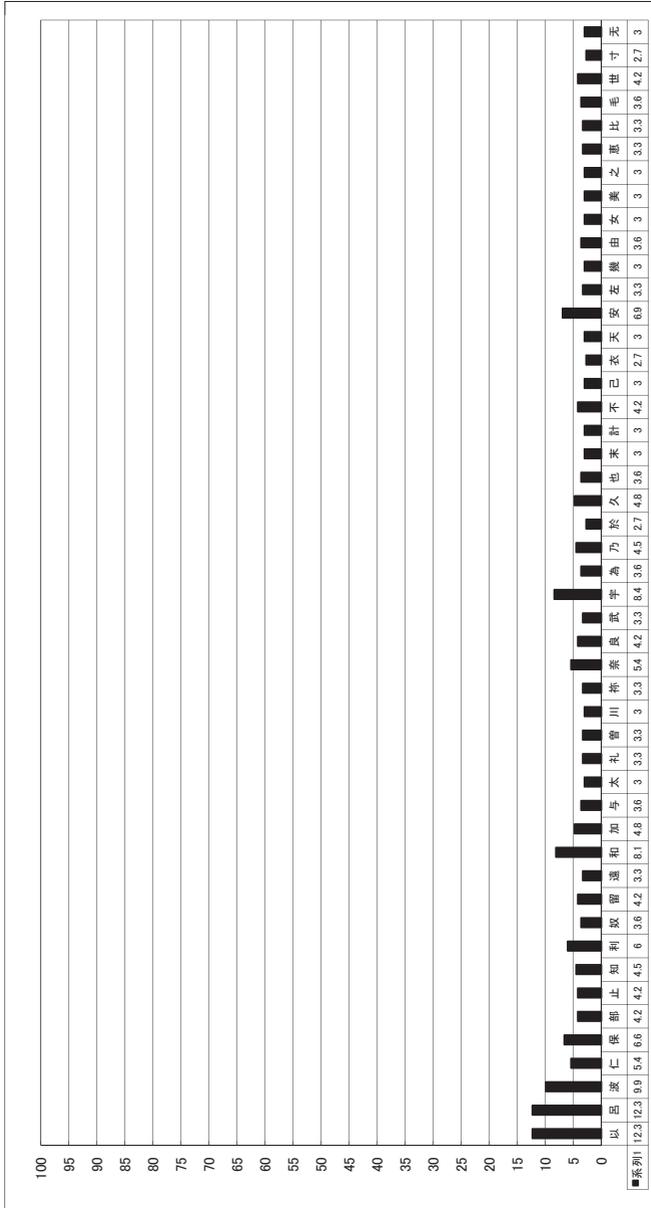
高等学校校芸術科書道仮名導入期の学習指導



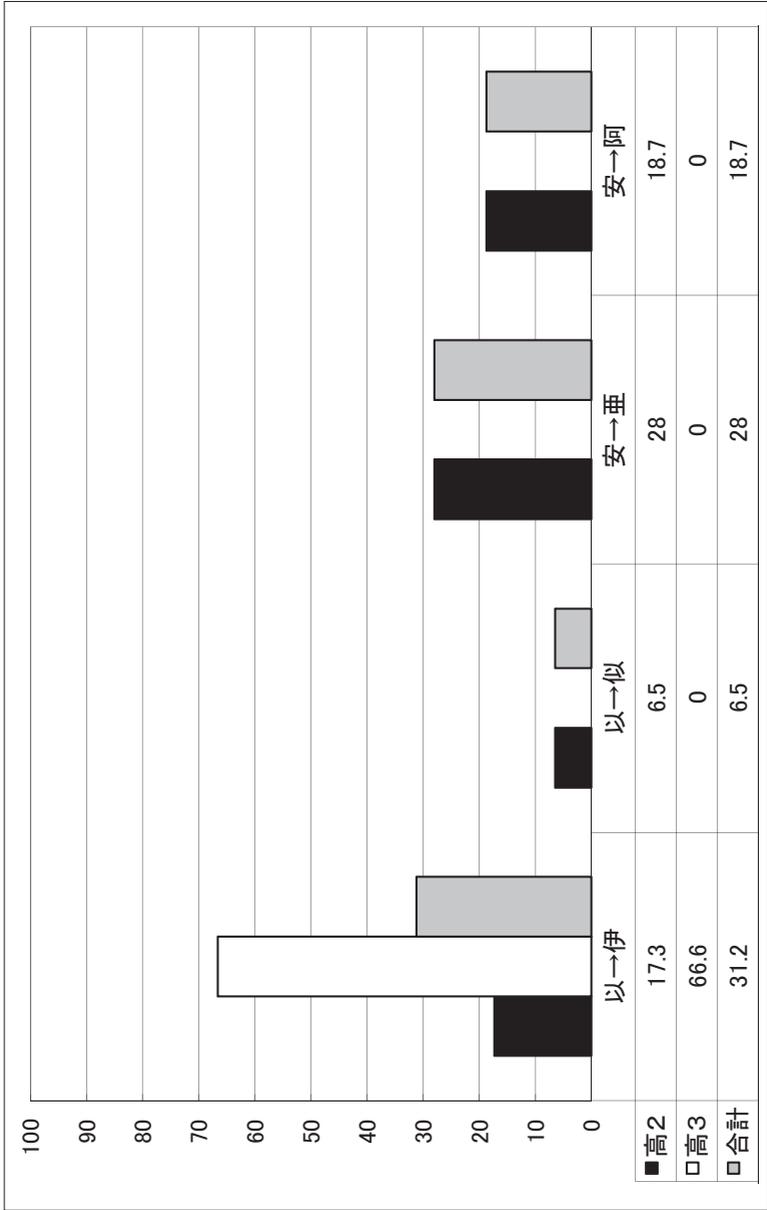
《表7》



《表8》



《表9》



歌」は認知はされていることが確認できた。

一方で「いろは歌」を筆記できるかという点では不完全な記憶に留まる者の割合が多い点は予想どおりであった。

また、平仮名に字源があるということの認知度の低さも予想されたとおりであり、当然字源となる漢字が何であるかを知らない者の割合が多数を占める結果となった。

「いろは歌」を正確に筆記できるようにすることは、古典の学習の観点からも、書道の授業において丁寧に行う必要性、重要性を改めて強く感じた。また、日常使用している平仮名がどのようにして成立したかを知識として正しく知っておくべきであろう。

特に将来、国語教員、書道教員を目指す者にとっては欠くべからざる基礎知識であることから、仮名導入期の学習として役立つ為のプリントを作成した。

〈2〉「いろは」とその字源の学習プリント作成

1 作成目的

- ・高等学校「書道」の教員免許を取得する予定の学生や高等学校で「書道Ⅰ」を選択した生徒が限られた時間の中で効率的に仮名の書法を習得し、発展的学習に進めることを目的として作成した。
- ・仮名導入期の学習副教材として活用される目的で作成した。

2 作成方針

- ・仮名および字源の変体仮名の文字は高野切第三種および同系統の文字を配するようにして作成した。
- ・文字は「かな名跡大字典」から採った。
- ・各文字の左脇に現行の平仮名および字源となる漢字を配置した。
- ・「いろは歌」として覚えられるよう、各頁のおわりは歌の句切れとした。

- ・判型はA4判とした。

1マスは2.2mm、十字リーダー入りの升目に文字を配置し、文字の線の位置がわかり易いようにした。(市販の「国語10マス十字リーダー入り」とほぼ同じサイズとし、ノートで硬筆による反復練習ができるようにした。)

3 学習方法

- ・仮名单体を1文字2回ずつ練習する。現行の平仮名との違いに注意しながら主に字形を学ぶ。
- ・変体仮名は左上に配置してある漢字を確認しながら1文字2回ずつ練習する。漢字からの省略、変形を学ぶ。
- ・全15回の授業を想定した場合。半分を仮名、半分を変体仮名の練習にあてれば、7～8回繰り返し学ぶことが出来、毛筆、硬筆に分けても3～4回繰り返すことが出来る。
- ・使用する筆記用具は毛筆は仮名用の筆、硬筆では筆圧を調整しやすく、書き直しができる2B～4B程度の鉛筆を推奨する。
- ・毛筆では下に毛氈を敷いて書き、硬筆の場合は下に毛氈ではなく、硬筆用の下敷きなどを使用して適度な弾力をもたせることを奨める。

4 学生に示す参考書

- ・植村和堂編『書道技法講座高野切第三種』1970年二玄社
- ・『高野切第三種』1979年清雅堂
- ・日本名跡叢刊『高野切古今集第三種』1980年二玄社
- ・拡大かな選集『高野切第三種』1981年二玄社
- ・松本春子著 かな名跡講座『高野切第三種』1981年
日本習字普及協会
- ・原色かな手本『高野切第三種』1982年二玄社
- ・日本名筆選『高野切第三種』1993年二玄社

- ・森岡隆著『かなの成り立ち事典』2006年教育出版
- ・小松茂美著『かな』1968年岩波新書
- ・小松英雄著『いろはうた』1979年中公新書
- ・山口謡司『日本語の奇跡』2007年新潮新書
- ・山口謡司『〈ひらがな〉の誕生』2016年 KADOKAWA

〈3〉 学習プリント案 — 「いろは」単体と字源—

プリントの構成（全5枚）

- ・はじめに
- ・本プリントの目的と習い方
- ・仮名を学ぶための教科書・参考書 1頁
- ・仮名—単体 字源の変体仮名—単体（各々1文字2回ずつ練習する）
2～5頁 〈以下に縮小して掲載〉

| | | | | |
|---|---|--|--|--|
| 以 | い | | | |
| 呂 | ろ | | | |
| 波 | は | | | |
| 仁 | に | | | |
| 保 | ほ | | | |
| 部 | へ | | | |
| 止 | と | | | |
| 知 | ち | | | |
| 利 | り | | | |
| 奴 | ぬ | | | |
| 留 | る | | | |
| 遠 | を | | | |

| | | | | |
|---|---|--|--|--|
| い | い | | | |
| ろ | ろ | | | |
| は | は | | | |
| に | に | | | |
| ほ | ほ | | | |
| へ | へ | | | |
| と | と | | | |
| ち | ち | | | |
| り | り | | | |
| ぬ | ぬ | | | |
| る | る | | | |
| を | を | | | |

| | | | | |
|---|----|--|--|--|
| 和 | わ | | | |
| 加 | か | | | |
| 与 | よ | | | |
| 太 | た | | | |
| 礼 | れ | | | |
| 曾 | そ | | | |
| 川 | かわ | | | |
| 祿 | ろく | | | |
| 奈 | な | | | |
| 良 | ら | | | |
| 武 | ぶ | | | |

| | | | | |
|---|---|--|--|--|
| わ | わ | | | |
| か | か | | | |
| よ | よ | | | |
| た | た | | | |
| れ | れ | | | |
| そ | そ | | | |
| つ | つ | | | |
| ね | ね | | | |
| な | な | | | |
| ら | ら | | | |
| む | む | | | |

| | | | | |
|---|---|--|--|--|
| 宇 | 宇 | | | |
| 為 | 為 | | | |
| 乃 | 乃 | | | |
| 於 | 於 | | | |
| 久 | 久 | | | |
| 也 | 也 | | | |
| 末 | 末 | | | |
| 計 | 計 | | | |
| 不 | 不 | | | |
| 己 | 己 | | | |
| 衣 | 衣 | | | |
| 天 | 天 | | | |

| | | | | |
|---|---|--|--|--|
| う | う | | | |
| ゐ | ゐ | | | |
| の | の | | | |
| お | お | | | |
| く | く | | | |
| や | や | | | |
| ま | ま | | | |
| け | け | | | |
| ふ | ふ | | | |
| こ | こ | | | |
| え | え | | | |
| て | て | | | |

| | | | | |
|---|---|--|--|--|
| 安 | あ | | | |
| 左 | さ | | | |
| 幾 | き | | | |
| 由 | ゆ | | | |
| 女 | め | | | |
| 美 | み | | | |
| 之 | し | | | |
| 惠 | ゑ | | | |
| 比 | ひ | | | |
| 毛 | も | | | |
| 世 | せ | | | |
| 寸 | す | | | |
| 无 | ん | | | |

| | | | | |
|---|---|--|--|--|
| あ | あ | | | |
| さ | さ | | | |
| き | き | | | |
| ゆ | ゆ | | | |
| め | め | | | |
| み | み | | | |
| し | し | | | |
| ゑ | ゑ | | | |
| ひ | ひ | | | |
| も | も | | | |
| せ | せ | | | |
| す | す | | | |
| ん | ん | | | |